

## 2017年度科学基礎論学会例会ワークショップ

### 様相の証明論と意味論の最前線：形而上学への接続再考

オーガナイザ 岡本賢吾（首都大）

提題者 山崎紗紀子（首都大）

遠藤進平（University of Amsterdam）

岡本賢吾

現代の（分析）哲学は、ますます様相概念への依存を深めており、必然性や（不）可能性に言及しない哲学的議論はほとんど考えられないほどとなっている。もちろん、哲学史を振り返れば、プラトン、アリストテレス以来、例えばスコラ哲学、ライプニッツ、カント、さらにポスト・カントの諸哲学に至るまで、様相概念の重要な適用例は枚挙に暇がない。しかしながら、そうした歴史的諸事例と比べたとき、現代の状況には少なくとも二つのはっきりした特徴がある。

一つ目は、様相的語法（それを支える様相論理の諸体系）の信頼度と柔軟性がこの上なく高まり、一昔前であったらすべて非様相的語法に書き換えて行われたであろう様々の議論が、むしろ好んで様相的語法によって定式化され、展開されるようになったということである。ところでこの事実は、改めて次のような問いを引き起こすだろう。そもそも、そのように多様な哲学的議論において様相的語法がトリヴィアルでない仕方でも有効に機能するとすれば、それはなぜなのか。——本ワークショップの目的の一つは、この問題に答えること、あるいはそこまで届かなくとも、答えに繋がる一定の有用な見通しを与えることである。

他方、現代の状況のもう一つの特徴は、すでに語り尽くされてきたことではあるが、様相的語法の背景に、純然たる非様相的・外延的なある種の数学的構造、すなわちクリプキ構造が控えており、これが可能世界意味論として機能することで様相的語法の強力な理論的支持を与えているということである。それだけでなく、クリプキ構造は、意味論を展開するための単なる抽象的なモデルというレベルを超えて、それ自体で端的な形而上学的存在者として認められる（あるいは、そうした形而上学的存在者＝可能世界の受容を動機づける有力な論拠と見なされる）こととなっている。可能世界に当たるアイデアは古来あったとはいえ、現代におけるように文字通りの「実在者」（オルターナティブな現実）として、しかも哲学的理論（形而上学）の本質的構成要素として様々の概念的解明（例えば反事実条件法的語法の説明）に役立てられる、といったことは、到底予見されていなかったと言ってよいであろう。こうした事情との関連で、改めて疑問となるのは、可能世界の実在化に至る以上の思考の筋道は、結局のところ、どのような哲学定正常化を与えられているのか、あるいはむしろ、目一杯頑張ったとするとどの程度まで与えられうるのか、と

いう点であり、同時にまた、クリプキ構造が果たしている理論的役割を哲学的に適切なやり方で生かす筋道は、果たして他にはありえないのか、という点である。——本ワークショップのもう一つの目的は、これらの疑問に対して、やはり、その答えに繋がる一定程度の見通しを与えることである。

具体的には、まず山崎が、様相論理についての証明論的な研究の最新の展開について、自身の成果も含めながら、報告・紹介し、特に、こうした展開が命題概念の哲学的な再分析にとってどのような貢献を持ちうるかを論じる。次いで、遠藤が、様相論理についての意味論的研究の最新の動向、特に、現在、自ら開発を進めているきわめて野心的な可能世界意味論の拡張、すなわち空間意味論について紹介し、さらにその上で、空間意味論に立脚した新たな仕方での真正様相実在論お形而上学の正当化の戦略について解説する。最後に岡本は、以上を踏まえて、上記の二つの問い、すなわち、(1)様相的語法の哲学的な遍在性と有用性はそのように説明されうるか、また、(2)クリプキ構造が、可能世界の実在化を正当化するとすれば、それはどのようにして、またどの程度までであるか、他方、そうした実在化以外の仕方でもクリプキ構造を哲学的・形而上学的に生かすとすれば、どのようなやり方が考えられるかについて答えることを試みる。